



TITLE:

大東亞日本の確立と大家の論理

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 大東亞日本の確立と大家の論理. 經濟論叢 1942, 55(4): 440-454

ISSUE DATE:

1942-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/131719>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷五十五第

月十年七十和昭

論叢

乘數理論の問題……………

文學博士 高田保馬

ナチス的人間像について……………

經濟學士 中川與之助

伊太利勞働體制の特徴……………

經濟學士 大塚一朗

資本形成の過程……………

經濟學士 中谷實

時論

大東亞日本の確立と大家おほやの論理……………

經濟學博士 石川興二

研究

近世絹織業の生産構造……………

經濟學士 堀江英一

佛領印度支那の關稅問題……………

經濟學士 河野健二

說苑

國家經濟會と大島貞益……………

經濟學博士 本庄榮治郎

附錄

彙報

時

論

大東亞日本の確立と大家おほやけの論理

石 川 興 二

緒戦の花々しさに酔ふて居た國民にも、大東亞戦の長期戦としての性格が今や眞剣に理解されはじめた。日清日露の如き短期武力戦以外には戦争の経験を有せざる今日の日本國民が、この長期戦に眞に良く對處し得るためには全く新たな覺悟を要するのである。

戦争はそれが短期なものである程武力自體の優劣によつて勝敗が決められるのであるが、それが長期なものである程國家の全能力の優劣がその勝敗を決定することとなる。大東亞戦は極めて長期に亙る戦である。故に單に軍の領域に於てのみならず日本の國家に於ける總ての職域の各々が長期に亙つてその本來の力を最大に發揮することによつてのみはじめて最後の勝利を得ることが出来るのである。

惡無限の戦争によつて自滅に向ひつゝある人類を救ふ唯一の道は、曩に述べたが如く、古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる眞理としての「大家おほやけの論理」を内外に徹するより外ない。これを内に徹するならば、それが

眞體制日本であつて、この眞體制日本の總力が大東亞日本の確立を可能ならしめる。この大東亞日本こそが英米の長期抗戰を克服するに足る主體である。即ち大東亞日本なるものは、眞體制日本の總力によつて確立せられ英米を克服し遂に萬邦をして各々その處を得しめ兆民をして悉くその堵に安んぜしむるに至るところのものである。かくて「大東亞戰爭なるものは戰なき世界を實現する爲めに世界史的實踐主體たる大東亞日本を確立する聖戰でなければならぬ」茲にはこの大東亞日本を確立すべき日本の總力について再び考察する。

二

日本の歴史は「天皇中心の大家」^{（以下略）}を基本的な主體とするところの一貫せる歴史であつた。即ち日本の歴史に於て「貫して變りないものは「天皇中心の大家」であつてこの大家がより具體的に發展して行くことが即ち日本の發展であつた。この大家は既に天孫降臨の姿に現はされて居る。それは天孫を中心として諸臣が各々の職分を以てこれに奉仕するところのものである。この天孫の直系が天皇であらせられ、諸臣の後者は諸氏團體となつて天皇に奉仕したのである。これが當時の「天皇中心の大家」の姿であつた。この氏族團體が次第に跋扈し來れる時それが「天皇中心の大家」を破らんとするところの私的なものとなつた。この私を否定して「天皇中心の大家」を確立したところのものが即ち大化改新であつた。故に大化改新に於ては、氏族團體の私有私用せし土地人民が否定せられて「天皇中心の大家」に歸した。この皇土を以てこの大家の成員たる皇民の生活を確保せんがために班田收授の法が行はれたのである。この大化改新に於ては、當時の世界史的な文化であつた支那の中央集權的思想並に諸制度と印度佛教の慈悲平等の思想とが「天皇中心の大家」を確立する爲めに用ひられたのである。即ち前者は天皇中心の全體を確立し後者はこの大家に於ける個を高めかくてこの間に介在せし氏族が否定され而も全と個が

尙ほ十分に確立しなかつたが故に再び藤原氏等の氏族團體が跋扈して「天皇中心の大家」に對する私的存在となつた。かくて諸氏族團體を主體とするところの庄園なるものが發展し不輸不入として國中國をなした。かくて平安朝末期に至つては京都に於てすら白晝強盜が横行する混亂狀態を呈するに至つた。「天皇中心の大家」をこの混亂より救ひ新秩序を確立する力となつたものは武力であつた。天皇より賴朝は守護地頭の任補權を勅許せられ、征夷大將軍に任命され、これまでの庄園の上に強權が立てられ封建的秩序がはじまつたのである。かくして將軍は、「天皇中心の大家」に役立つべきものであつたが、自己がそれに於てあるところの「天皇中心の大家」の基本的主體性を忘れ自らを全體主義的に主體化せんとするに至つて、「天皇中心の大家」を破らんとするところの私となつた。故に「天皇中心の大家」の立場より否定されなければならない。これを否定して「天皇中心の大家」が前面に現れ來つたのが明治維新である。この際「智識を世界に求め大いに皇基を振起すべし」との大精神を以て西歐の個人主義思想が「天皇中心の大家」を具體化するに役立つものとして取り入れられた。

本來西洋の近世の思想に於ては、封建的な專制君主に對して個々人を以て天賦人權を有するところの絶對的主體として對立抗爭せしめ以て專制君主を否定し、かくして個々人を絶對的な主體として確立し得たのである。故に個々人が最高原理であつてこれを當然に拘束し得る何物も考へられなかつたのである。故に國家すらこの絶對的主體たる個々人の契約によつて成立すべきものとして規定されたのである。かくの如き絶對的主體としての個人なるものは、我國體であるところの「天皇中心の大家」とは兩立し得ないのであるが、それが維新の詔に於ては大家の論理の立場に於て止揚せられたのである。即ち「武家權を専らにし」た徳川幕府の全體主義の下に抑壓せられて居た國民を「億兆の父母」たる 天皇の「赤子」として「今般朝政一新の時に當りて天下億兆一人もそ

の處を得ざる時は朕が罪なれば」との大御心より「天皇中心の大家」に於て各々その所を得しめ、その志を致さしめんとし給ふたものである。

然るにこの個々人がこの「天皇中心の大家」より遊離して自己を主體化せんとするに至るならば「天皇中心の大家」と矛盾するところの私となるのである。このことは先づ財を有てる個々人の集合としての資本家階級に於て顯著に現れて來た。かくて基本的主體たる大家との關係が忘れられ、個々人が自己を以て主體とするところの個人主義論理が支配的となり來つたのである。かくの如き個人主義論理なるものは我國體と矛盾するものなるが故にそのまゝにして置くことは出來ないのである。

かくの如き個人主義論理を是正するものとして獨逸の全體主義論理が我國にも取入れられ來つた。全體を支配する權力の把持者が自己を主體とするところの全體主義論理なるものは個人的自覺が未だ發達せざりし中世に於ては徹底的なものであつた。然るに近世の個人主義社會を通過して個人的意識が發達した個々人を一方的に支配し切ることは不可能である。故に或程度個人の立場を尊重してこれと妥協することによつてこれを統制しなければならぬ。かくしてそこには統制するものと統制されるものとの對立が見られる。かくの如き全體對立の立場もそれ自身としては我國體と矛盾するのであり従つて日本の總力を發揮するに至り得ない。

我國に於てはこの全も個も「天皇中心の大家」に於てあるのである。然るにこの大家を忘れて自己を主體化せんとすれば全も個も共に大家を破るものとして私である。大家に卽した時はじめて共に公である。本來全も大家の全であり個も大家の個である。故にこの全と個とは大家に於て内面的に統一されずには置かないのである。即ち國の全と民の個とは全個一如の天皇に於て統一せられ以て「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ボシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上

ニ奉シ君民一體」となりはじめて「億兆一心國家ノ總力ヲ舉ケ」得るに至るのである。

かくの如くこれまでの日本は印度、支那、西歐等の諸論理を「天皇中心の大家」に取り入れ以てその總力の發揮を計り非常時に處し來つたのである。而も今日は最早やこの爲めに他より取り入れるべき論理はないのである。今やなすべきことはこれまで取り入れたるこれ等の論理を「天皇中心の大家」の立場より眞に止揚し以て大家の論理自體を具體化しこれを徹底的に具現することである。この日本歴史の當然の發展方向に於て、眞體制日本が確立しその總力によつて大東亞日本が確立されることとなるのである。

三

然るに明治以來久しきに互つて異國的な論理に把らはれて居た日本に於ては、今日尙ほこの異國的論理が國體に同化されずこれが國家總力の發揮を妨げる著しい原因となつて居るのである。故に日本の眞の總力の發揮の爲めに先づ必要なことは、この異國な論理の束縛より解放されることである。

これまでの日本人は多く英米の個人主義論理によつて働いたのである。所謂職業なるものは即ちこれである。それは自己の收入の爲めに働くのであるが故に、收入の多い仕事を選んでこれに就くのである。收入を必要とせざるものは何等の仕事をも爲ないことを得意としたのである。職業に就て居るものも收入を必要とせざるに至ればその仕事を止めて閑地に就いたのである。かくの如くに收入を目的とする職業にあつては仕事自體を楽しみこれに精根を盡すと云ふことはあり得ない。かくては一國全體の總力を舉げ得ないことは云ふまでもない。

而も個人主義的論理に立てる働きは個々人の利己心のまゝに働くが故に國家全體の總力を必要とする現代の如き世界的非常時に於ては、これをそのまゝに放任し置くことは出来ない。かくて全體的效果を舉げる爲めにこれ

に國家權力の働きの加はることが必要となつたのである。かくて一國の經濟活動も統制するものと統制されるものとの關係より成立つこととなる。而して統制するものは全體主義の論理を以て働き統制されるものは個人主義の論理を以て働く。要するに統制主義の論理は全個對立の論理である。統制するものは國家權力の把持者として權威的地位に立つ。これに對し被統制者は統制さるべきものとしての立場に立つ。かくの如くそこには全的な立場に立つものと個的な立場に立つものとが對立し、この兩者はその論理を異にするが故にその間に妥協を必要とすることとなる。かくて相互に制肘し合ひ共に全力を發揮し得ない。故にこの全個の對立を越へざる以上眞に國家の總力が發揮されし得ないのである。

かくて個人主義の論理を以てするもまた全體主義の論理を以てするも、日本國家全體の總力を眞に發揮することとは出来ないものである。日本がその總力を發揮する道はこの全個が國體に徹底するより外ない。このことは今や大東亞戰に於ける皇軍の驚異的な働きによつて實證されつゝある。

マレー沖の海戰に於ては、一分間六萬發の砲彈を發射し得るところの不沈戰艦と云はれたプリンス・オブ・ウェールズが日本の雷撃機によつて轟沈せられたのである。このことは如何にして可能であつたか。

個人主義論理の立場に立つものにとつては、個人が最高の原理である。この個人を否定すると云ふことは考へられ得ないのである。個人が國家の爲めに最善を盡した以上敵に降伏することも許されてゐるのである。香港戰に於て平然として我軍に降伏し來つたヤング提督の態度もまた英米排虜の意外に朗な態度もこの個人主義的論理の立場に立つて考へればよく理解され得るのである。若し日本の軍人も同様にかくの如き個人主義の論理に立つものであるとするならば、それは一分間六萬發の丸を發する九彈に向ふて近づくことは出来ず、従つてプリン

「ス・オブ・ウェールズは沈め得ないのである。然るにかくの如き態度は日本人としてはあり得ない。日本人が國家の爲めに働く」と云ふことは個人が國家を對象として働くのではなく、國家自體となつて働くのである。即ち「天皇中心の大家」となつて働くのである、この大家となつて働く者にとつては個人としての生死は問題ではない。即ち個の生死を越へて働いて居るのである。かゝる個の働きを通じて國家の働きが十全に實現されるのである。この個に對しては一分間六萬發の丸障も障害たることは出來ないのである。即ちプリンス・オブ・ウェールズと日本の雷撃機との戦は單に武器の戦ではなく、その根柢に於て次元を異にする論理の戦である。而して低次元の論理は高次元の論理に敗れざるを得なかつたのである。

皇軍の根柢をなす論理は、かくの如く個人主義論理と異なるのみならず更に全體主義の論理とも異なるものである。即ち特殊潜航艇の勇士は、自己がそれに乗つて死に行くべき舟を自ら工夫してその實現を上官に懇請し遠足に行くが如き朗な心持をもつてこれに乗り敵地に突入し從容死に就いたのである。それは權力者の命令なるが故にこれに服従することによつて働く全體主義の論理とは異なるものがある。即ち自ら大家となつて働くところの論理である。

かくて眞に日本的な論理は全と個とが對立して居る統制主義の論理とは異なり、個が全を宿し自ら全となつて働くところの論理である。かくして日本の國家に生きて居る總ての人々がこの國家となつて働く時、これ等の人々は自己の生死を越へて大家となつて働くのであるが故にそこに最大の力が發揮せられるのである。更にこれ等總ての人々は同じ日本の國家となつて働くのであるが故に億兆一心とならざるを得ない。かくてこの大家の論理が日本國民の總てに徹した時、こゝにはじめて億兆一心となり國家の總力が發揮し得られるのである。皇軍が世

歴史的に驚異的な働きを現はしたと云ふことは、この大家の論理が皇軍に於て他の職域に於けるよりも最もよく徹底されて居るが故である。即ち皇軍の總てが「天皇中心の大家」となつて働いて居るが故である。

かくて日本の國家の總力が眞に發揮されるが爲めには、他の域に於て働いて居るものもこの皇軍に於けると同様にこの大家の論理が徹底し大家とあつて働かなければならない。かくしてはじめてこれ等の領域も皇軍に於けると同様に、世界を驚嘆せしむべき偉大な力を發揮するに至るのである。

即ち經濟するものが眞に國家全體の運命を自己に宿しこの國家となつて働くならば、こゝにはじめて經濟域の總力が發揮されるのである。各自はその各々の能力を國家經濟に最大に役立たしめ得る地位に立つて或は勞働するものとして或は企業するものとして働くのである。また財を有するものはこれを國家の爲めに最善に働かすことを工夫するのである。

これを教育の域について見るも、この大家の論理が徹する限り、教育者は所謂職業意識によつて自己の利益の爲めに働くのでもなく、また權力者の命令によつて他律的に働くのでもない。各自は國家の運命を自覺しこの運命を擔ふて國家となつて働くのである。かくしてはじめて教育域が億兆一心となつて總力を發揮し最大の教育的效果を舉げるに至るのである。かくしてはじめて教育者、經濟者等諸種の職域に於てある總てのものが皇軍と同様な大家の論理に立つて働くならば、一切の職域が最大の力を發揮しこゝにはじめて億兆一心國家の總力を擧げ得るのである。この總力を以てはじめて日本は飽くまで戦ひ抜くことが出来るのである。

然らば如何にして總ての人々が大家の論理に徹底して働き得るに至るであらうかを更に進んで考へて見なければならぬ。これを先づ皇軍について見るに、軍人に於て大家の論理が最も徹底して居ると云ふことは偶然でな

それ故にこの皇軍の域にあるものは、衣食住、教育の一切に至るまでその根本原理たる大家の論理によつて貫徹されて居るのである。このことを先づ皇軍の學校教育について見るに、日本國民にしてそれ等軍の學校に入學することを志望するものは、その能力を有するものより入學を許されるのである。既に入學を許されたる以上教育に必要な一切は衣食住、醫藥に至るまで國家より確保されるのである。故に入學の資格としてはその人が資産を有するや否やは問ふところではない。若し資産の有無をその資格とするならば、國民中その能力に於て軍人

に適した人と雖も財なき故に軍人となり得なかつたであらう。然るにこれまで優秀な軍人となつた人は、財ある家庭より出た人々であつたよりもむしろ財なき家庭より出た方が多かつたのである。故に若し他の學校教育に於けるが如く財ある家庭の人のみがこれに入り得るものであつたとするならば、これ等多くの優秀な軍人を皇軍は有つことが出來ず、この點に於て皇軍の力は今日よりも劣つて居たであらう。即ち軍の總力を發揮する爲めには苟も日本國民にして軍人たることを希望する總ての人々の中よりこれに最も適當する能力を有するものを選んで學校に收容し衣食住の一切に至るまでこれを國家が確保して何等の心配なく只管にその軍人たるの能力を磨かしたものである。

このことは日本國民中軍人たらしとするものにのみ限らるべきことではない。他の職域に進むものについても必要である。かくして日本國民の總てがその能力次第に教育を受けその志す職域に立つことが出来ることとなる。かくの如くにしてはじめて日本に生れた總ての人々が陛下の赤子として眞に重んぜられ各々その處を得しめられることが出来るのである。

このことは日本國民をして各自の能力を最大に啓發せしむる所以であるのみならず、またかくして最大に啓發されたる能力を最大に發揮せしめ得る所以である。即ちこれまでの英米の個人主義的論理の支配の下に於ては教育も商品であり高き教育の爲めには多くの費用を要したるが故に高き教育を受け従つて高き地位に就き得るものは殆んど財ある家庭の人々に限られたのみならず、これ等の人々は多く教育を投資と考へ收入多き地位を與へる職業に殺到し來つたのである。例へば、嘗てかゝる學部であつたところの醫學部に對して今日その志望者が激減しつゝある所以のものは、その職業の賚らす收入が嘗てより著しく減少しつゝあるが故である。かゝる個人主義

的論理に立つて教育されたものはその職業に就いて自ら個人主義的論理に立つて行動することとなる。かくして収入の爲めに働くものゝ能力の發揮の仕方は、大家となつて働くものとは全く異なるのである。故に總ての職域が眞に總力を發揮し得るが爲めには日本國民の總てが「天皇中心の大家」の子として先づ大家の論理に基いて教養されなければならないのである。

總ての人々が眞に大家となつて眞に働き得るが爲めには、その教育が大家の論理によつて爲さるゝのみならず、更に進んでその働きの功績に對しても大家の論理を以て酬ひられることが必要である。今これを皇軍について見るならば大家となつて働いたそれ等の人々に對しては「天皇中心の大家」の子として陛下より位階勳等を賜はるのである。このことはこれまでは殆んど軍人並に官吏に限られてゐたのであつて而もこれが當然であるが如くにすら考へられてゐた。「軍官民」なる語はこの差別を現はして居るが如くに見られたのである。然るに我國體は「天皇中心の大家」であつてそこにあるものは總て陛下の赤子であり等しく大家の子である。故に國民の總ては大家の子として大家となつて働くと共に大家の子として大家によつて酬ひられることが最も望ましいのである。

學問藝術の功勞者には勳章が與へられるのみならず特に文化勳章が制定されたのであるが、このことが他の職にも擴充されることが必要となりつゝある。これを今日の經濟域について見んに統制經濟の下に於ては各人は國家より定められたる目的の爲めに働くことが益々多くなり、その収入も嘗ての個人主義社會に於けるが如くに自由に追及し得るものではなく種々なる公的制限を受けるのである。其他統制經濟の下に於ては種々なる公人的な責任を負はされて居る。かくして經濟するものも單なる私人ではなく益々公人となりつゝあるのである。今や總理大臣が自ら優れた炭坑夫にまた技術者に名譽章を授け更に最近勞勳顯功章を定むるに至つたのはこの方向への

進展である。

皇軍が總力を發揮しつゝある所以については更に考へらるべき點がある。それは軍人たるものゝ妻子の待遇についてである。大家となつて働くものは個人の生死を越へて働いて居るのである。故に絶へず死に直面して居る故に國家はその人の死後と雖も妻子の運命について懸念する必要があるに様に努めて居るのである。

この點についても我々は他の職域について考へなければならぬ。官吏の遺族手當なるものはこの意味を有するが事實この目的の爲を達するに足るものにしなければならぬ。其他の職域に於てはこの點についてもこれまで個人主義的論理に放任されて居た。即ち遺産あるものゝ妻子は何等の心配がなかつたが、然らざるものゝ妻子はその主人の死と共に全く路頭に迷はざるを得なかつたのである。従つてまた人々は自己の死後の妻子のことを考へ愈々收入本位に働く傾向が強くなり眞に大家の爲めに働き得ないものが少なくなかつた。大家の子として大家となつて働いた人の妻子は大家の子としてこれを生かさなければならぬのである。かくしてその人は眞に「今日よりはかへりみなくて大君の醜の御盾と出で立つ我は」となり得るのである。

かく「天皇中心の大家」の子としてその能力次第に大家によつて教養せられ大家によつて酬ひられるならば總てのものは、これまで久しく互つて把らはれて居たところの英米の個人主義論理並に全體主義の論理より完全に脱却することが出來茲にはじめて眞に大家となつて働き得るに至るのである。かくて皇軍がその能力のみならず生命に至るまで自己の有てる一切を擧げて皇國に盡すが如く、總ての職域にあるものが大家となつて一切を擧げて働くのである。かくして經濟域についてもこの域にある總てのものは各自の有つて居る能力を以て生命を以てまた財産を以て大家の爲めに盡すに至るのである。これは「天皇中心の大家」に生を享け大家の子たるものに當然のことであるが、これまでの經濟は英米の個人主義論理が支配して居たが故に各自の能力も財産も當然各自

の利益の爲めに用ひべきものと考へこの境地に至り得なかつたのである。

かくの如き大家の論理に貫かれたる時、それ等職域の構造も自ら今日のものと異ならざるを得ないこととなる。最もよく大家の論理によつて貫かれて居る皇軍の域に於ては皇軍の首長たる陸軍大臣並に所謂三長官なるものは、陛下より御任命を受けるものであることは勿論であるが、それは決して他より軍に加へられたものではなく、軍の中より軍の總意を代表するに最も適當なる者が選ばれて御任命を受けて居るのである。かくて上下一體天皇を大元帥陛下として仰ぎ奉り「天皇中心の大家」が確立して居る。故にこの軍に於ては至るところ大家の構造が現れ、上は大家となつて命じ下も大家となつて従つてゐるのである。然るに今日の經濟域に於ては統制的地位に立つものは自然發生的に成立せる諸の企業團體を權力的に統制するものとして上より任命されたところのものであつてこの統制する者とこれによつて統制される者との間には尙ほ全個の對立があり、その働きに對しても異なつた論理によつて酬ひられて居る。この全個の對立が今日經濟域の總力の十分なる發揮を妨げてゐるのであるが、これに對して大家の論理を徹底せしめるならば、前述せし如く、全も大家の企となり個と大家の個となり經濟域自體が至るところに大家の構造を現らはして、最大の總力を發揮するに至るのである。

四

以上職域について述べたことが現在並に將來の國民の全部に對して徹底せんが爲めには進んで地域ことに隣組制度について考へなければならぬ。先づ隣組による配給について見んにそれには個人主義論理と異なる二つの要素がある。その價格が公定されこの貨物につき各人の得らるべき質と量が切符によつて定められて居ることである。各自はこの貨物をその限度に於て代價を支拂ふて取得し得るのである。故にこの種の貨物については、如何に多くの購買力を有する人と雖も切符を有せざる限り得られない。かくして國民に必要な貨物が有産者に集

申することが防がれてゐることは正しい。他方切符を有するも購買力を有せざる限りこれを獲得し得ない。國民の總てを大家の子としてその生を完ふせしめんには國民の總てにその必要品の切符を有効に使用せしめ得る限度に於て購買力が確保されなければならない。各職域に於て働くものに對する家族手當制を押し進めることはこゝにまで至ることを要するのである。これ家族手當はその人の受くる収入額と關係なく家族一人につき一定額が與へられるものなるが故である。而も尙ほ多くの國民の中には諸種の不幸の爲めに必要品を購ふに足るだけの力を有せざるものがある。各隣組内に於てはこの事情が明にされ得るのである。この際に於ては適當な機關に訴へてこの人々に人間たるに必要な衣食住を確保しなければならない。以上衣食住について述べたことは教育についても同様である。大家の子として生れたものには總てその能力次第の教育が與へられその人の能力の最大なる啓發が計られなければならない。同様のことはまた醫藥についても云はれ得るのである。かくして隣組制度を通じて國民の總てに人間たるに必要な衣食住・醫藥・教育が確保されるが爲めには更にこれに必要な物資の配給設備・病院・學校等が、隣組・町内會・町内聯合會・市・縣等の各地域共同體に適當に設けられなければならない。而してこれ等の地域共同體には、「上仁愛ノ化以テ下ニ及ボス」と仰せられた大家の精神が貫徹せられ實現せられなければならない。

かくして國民に人間たるに必要な衣食住・醫藥・教育が確保される時、總ての人々は今日の個人主義的論理の束縛より解放されることによつてその體力能力は進み、青年は早く結婚することを得、多くの健全な子供が生まれ、幼兒には必要な物資が與へられ、これを立派に教養されたる母親が賢明に育てその能力次第に學校に進み入りその能力を十分に啓發することが出来るのである。かくして眞に大家の子として育てられた總てのものは大家の子としてその啓發された能力を各自の職域に於て最大に發揮するのである。更にこの人々の妻子は萬一の場

合と雖も大家によつての生活を確保され居るが故に個人主義論理に基いて敦養されしものとは異なり眞に大家となつて個の生死を越へて働くことが出来るのである。かくして地域共同體が確立することによつてはじめて職域共同體が確立し、こゝに國家の總力が遺憾なく發揮され得るのである。またこの職域共同體が確立することによつて國家に必要な諸種の働が遺憾なく發揮せられ以て地域共同體も確立し得るのである。

かくの如くに「天皇中心の大家」の論理が總ての職域並に地域に徹し行く時、こゝに日本の人口は著しく増大し體力並に精神力が著しく向上し、この量的並に質的に高められたる能力は總ての職域に於て最大に發揮せられることとなる。これこそが眞體制日本の億兆一心の國家の總力である。古代の氏族の原理の支配せる古代に於ても全體主義原理の支配せし中世に於てもまた個人主義論理の支配せし近世にても全個對立の統制主義原理の支配する現代に於ても日本の總力は未だ十分に發揮され得なかつたのであるが、これ等の論理を止揚して今や日本の基本的な主體たる「天皇中心の大家」が地域並に職域の一切を貫徹し、こゝにはじめて日本の總力が最大に發揮されるのである。

而もこの眞體制日本の總力はこれまでの環境を越へて進まざるを得ない。主體が環境を作り環境が主體を作る。これまでの環境に於ける日本が自己に大家の論理を徹底してその最大の總力を發揮する時その力はこれまでの環境を越へてより大なる日本の環境を形成し行くこととなる。このより大なる環境に於て大家の論理は一層徹底的に實現され行くのであるがかくして大東亞の中にある英米の抗日基地たる濠洲、ニュージランドよりその白人主義を排除しこれを日本の人口並文化の基地として包含せしところの大東亞日本が確立されるのである。¹⁾この意味に於て大東亞日本は日本の國體の論理が日本を貫徹した必然的な結果であると云ふことが出来るのである。この大東亞日本を實踐主體として眞に東亞が大家となり更に進んで世界が大家となるのである。

1) この大東亞日本については本誌八月號前掲拙稿參照。